

〔古事記傳〕九八俣遠呂智八俣之とを添へて紀に頭尾各有八岐とあり、遠呂智は書紀に大蛇と書り、和名抄に蛇和名倍美、一云、久知奈波、日本紀私記云乎呂知とあり、今俗に、小く尋常なるを久知奈波と云ひや、大なるを幣毘と云ひは俗に蛇と云はかり、大なるを宇婆婆美と云きはめて大なるを蛇と云なり、遠呂智とはなるをぞ云けむ、名義尾於杼呂智にて、尾のおどろくしきを云なるべし、於杼呂は棘字義於止驚など、同言なり、さてその於は、遠の韻にある故に省り、註又遠杼は遠と切ればなり、そもく此蛇は上なき靈劍を尾中にしも含持れば、其威靈にて、餘所よりも、尾は殊にかめしくおどろくしかりけむ、故尾を以て名に負せしなるべし、智は例の稱名なり、中蛟などの知も同じ、

〔古事記上〕御祖命告子云、可參向須佐能男命所座之根堅洲國、必其大神議也、故隨詔命、而參到須佐之男命之御所者、其女須勢理毘賣出見爲目合、而相婚、還入白其父言、甚麗神來、爾其大神出見、而告此者謂之葦原色許男、即喚入而令寢其蛇室、於是其妻須勢理毘賣命、以蛇比禮二字以音授其夫云、其蛇將咋、以此比禮三舉打撥、故如教者、蛇自靜、故平寢出之、

〔日本書紀七〕四十年十月是歲、中日本武尊更還於尾張、中於是聞近江膽吹山有荒神、即解劍置於宮簀媛家、而徒行之、至膽吹山、山神化大蛇當道、爰日本武尊不知主神化蛇之、謂是大蛇必荒神之使也、既得殺主神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行、時山神之興雲霧水、峯霧谷曠、無復可行之路、乃棲違不知其所跋涉、然凌霧強行、方僅得出、猶失意如醉、因居山下之泉側、乃飲其水而醒之、中下

〔日本書紀十一〕五十五年蝦夷叛之、遣田道令擊、則爲蝦夷所敗、以死于伊寺水門、中是後蝦夷亦襲之、略人民、因以掘田道墓、則有大蛇發、瞋目自墓出、以咋蝦夷、悉被蛇毒而多死亡、唯一二人得免耳、故時人云、田道雖既亡、遂報讎、何死人之無知耶、

〔日本書紀十四〕七年七月丙子、天皇詔、少子部連螺贏曰、朕欲見三諸岳神之形、註汝膂力過人、自行